



同志社大学文化情報学部蔵無名歌集 : 翻字と解題 (5)

著者	福田 智子, 三井 義勝, 村田 冴子, 李 心媛
雑誌名	文化情報学
巻	12
号	1
ページ	11-24
発行年	2016-10-20
権利	同志社大学文化情報学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000015491

資料紹介

同志社大学文化情報学部蔵無名歌集

—翻字と解題(5)—

福田 智子・三井 義勝・村田 冴子・李 心媛

同志社大学文化情報学部蔵無名歌集（仮称『いろは和歌集』）は、和歌を句頭の文字によって、いろは順に分類・配列した歌集である。本稿では、歌頭が「あ」「さ」「き」「ゆ」「め」「み」の歌、計150首について、『新編国歌大観』を対象に他出歌集を検した。その結果、前稿までと同様、『古今集』『新古今集』をはじめとする勅撰集の他、『拾遺愚草』『壬二集』などの六家集を重視する撰歌態度が窺えた。また、本稿で採り上げた範囲内には、『伊勢物語』の歌が集中して見られる箇所があるが、物語本文では明記されない作者名について、『冷泉家流伊勢物語抄』をはじめとする古注釈の説を採るという姿勢も、これまでの考察と軌を一にする。なお、出典未詳歌は9首あり、さらなる調査が必要である。

1. はじめに

本稿は、福田智子・児玉駿介・加藤みどり「資料紹介 同志社大学文化情報学部蔵無名歌集—翻字と解題(1)—」(『文化情報学』第9巻第1号、2013年10月)、同「資料紹介 同志社大学文化情報学部蔵無名歌集—翻字と解題(2)—」(『文化情報学』第9巻第2号、2014年3月)、福田智子・久野由香子・村田冴子「資料紹介 同志社大学文化情報学部蔵無名歌集—翻字と解題(3)—」(『文化情報学』第10巻第1、2号、2015年3月)、福田智子・穂満建等「資料紹介 同志社大学文化情報学部蔵無名歌集—翻字と解題(4)—」(『文化情報学』第11巻第1号、2015年11月)の続編である。

これまで、歌頭が「い」から「て」までの歌(「ろ」「へ」「り」「る」「ら」「ぬ」の歌はない。また、「お」の歌は「を」の箇所に掲出。)、計681首について、『新編国歌大観』を対象に他出歌集を検したが、本稿では引き続き、「あ」「さ」「き」「ゆ」「め」「み」の計150首(「あ」「さ」「き」「み」は各30首。また、「ゆ」は20首、「め」は10首である。六十九丁裏から八十四丁表にあたる。)について、同様の翻字と考察をおこなう。

2. 翻字

【凡例】

- ①和歌本文の歌頭には、(1:い1) というように、歌集全体の通し番号と、歌頭の文字ごとの通し番号を付す。
- ②本文の表記は、できるかぎり原態を生かして、通行の字体に翻字するよう努めた。歴史的仮名遣いに統一したり、私に濁点を付したりすることは避けた。
- ③和歌の頭注と脚注の位置に記される集付と作者名は、和歌本文の後に、(頭注/脚注)の順で示す。なお、どちらか片方しか記されない場合は、記述のないことを示す記号として「—」を用いる。
- ④他出歌集の調査範囲は、『新編国歌大観』に拠り、巻数-通し番号を付した歌集名の略称と歌番号を示す。
〈例〉3-19 貫之 355『新編国歌大観』第三巻19番目の『貫之集』355番歌
- ⑤本書と他出との間に、本文異同(表記の異同は除く)のある場合は、▽を付して異同を句ごとに挙げ、歌集名と歌番号を示す。
- ⑥本書の和歌本文に見せ消チ・挿入記号・傍書な

どの書き入れがあった場合は、〔本文注記〕の項目を設け、説明を加える。なお、傍書が見せ消チや挿入記号とともに記されている場合は、書き入れ修正後の本文を掲げる。

【翻字】

(682:あ1) 逢ことは玉のをはかり おもほえてつらきこゝろのなかく見ゆらん (同/業平)

〔本文注記〕六十九丁裏1行目に下句、10行目(最終行)に上句が記される。それぞれの行末に「○」印あり。

5-415 伊勢語 63、10-206 歌林良 395、▽ [ながくもあるかな] 1-9 新勅撰 949

(683:あ2) 秋や来る 露やまかふと おもふまてあるは涙のふるにそありける (伊勢物語/有つね)

5-415 伊勢語 27、1-8 新古今 1498

(684:あ3) あたなりと 名にこそたてれ 桜花 年にまれなる人もまちけり (同/有常むすめ)

1-1 古今 62、3-6 業平 2、5-302 歌色葉 70、5-311 八雲 40、5-332 悦目抄 80、5-415 伊勢語 28、10-177 定家八 160、▽ [ひともとひけり] 7-2 業平 21

(685:あ4) 秋の夜のちよを一夜になせりともことはのこりて鳥やなきなん (伊勢物語/染との)

5-415 伊勢語 46、1-11 続古今 1157、2-15 万代 2206、▽ [あきのよを] [とりやなきてん] 10-212 源氏注 251

(686:あ5) あつさ弓ひけとひかねとむかしより心は君によりにし物を (同/有常むすめ)

5-415 伊勢語 54、5-299 袖中抄 123、▽ [ひきみひかずみ] 1-9 新勅撰 871、1-10 続後撰 813

(687:あ6) 明ぬれは暮るものとはしりなから猶うらめしきあさほらけかな (百人一首/藤原道信)

5-275 百人秀 51、1-4 後拾遺 672、5-223 時代不 275、5-270 後六々 72、5-276 百人首 52、10-177 定家八 1045、10-178 八代秀 35、▽ [かへるものとは] 3-61 道信 3

(688:あ7) 朝露はきえ残りてもありぬへしたれかこの世をたのみはつへき (伊勢物語/小野小町)

5-415 伊勢語 93、1-16 続後拾 1241、6-10 秋風集 965

(689:あ8) あらさらん此よのほかのおもひ出にいま一たびのあふよしもかな (百人一首/和泉式部)

▽ [あふこともがな] 5-276 百人首 56、1-4 後拾遺 763 あふこともがな、3-73 和泉集 744 あふこともがな、5-275 百人秀 61 あふこともがな、5-301 古来風 466 逢ふ事もがな、10-177 定家八 1386 あふこともがな、10-178 八代秀 39 あふこともがな

(690:あ9) 東路のさやの中山なかへにいつしか君をおもひ初けん (古今/友則)

〔本文注記〕第四句「いつしか君を」の「つ」に右傍書「何イ」あり。

▽ [なにしか人を] 1-1 古今 594、3-11 友則 45、5-166 俊成合 29、5-223 時代不 99、10-177 定家八 919、10-180 五代枕 432、10-181 歌枕名 4998

(691:あ10) あふ坂の関路まさしきものならばあかす別る、君をと、めよ (同/なにはのよろつを)

〔本文注記〕第四句「あかて別し」の「て」「し」見せ消チ。右傍書「す」「る、」あり。結句「人と、めよ」の「人」見せ消チ。右傍書「君」あり。

▽ [関しまさしき] 1-1 古今 374、10-177 定家八 748、10-180 五代枕 1808、10-181 歌枕名 5728

(692:あ11) 明るまでまちてやみまし時のまにかはるこゝろのまたやかわらん

〔本文注記〕七十丁裏1行目に下句、10行目(最終行)に上句が記される。それぞれの行末に「○」印あり。

未詳

(693:あ12) あしはらや萩もす、きもしけれど、とてもみちあり世にしあらねは

未詳

(694:あ13) 暁のなからましかはしら露のおきてわひしき別せましや (一/貫之)

1-2 後撰 862、1-3 拾遺集 715、2-4 古六帖 2733、2-6 和漢朗 420、3-19 貫之 692、10-177 定家八 1047、10-212 源氏注 218

(695:あ14) 朝毎のかゝみのうへにみる影のはかなかりける世にやとるかな

▽ [むなしかりける] 1-11 続古今 765、▽ [あさ

ごとに] [むなしかりける] 2-15 万代 1700、3-130
月清 1592

(696:あ 15) 逢ときは かたりつくすと おもへとも
別になれは のこることの葉
未詳

(697:あ 16) あふ坂は 東路とこそ きゝしかとこゝ
ろつくしの 関にそありける (—/左京大夫道雅)
1-4 後拾遺 748、5-270 後六々 91、10-177 定家八
1108、10-180 五代枕 636、10-181 歌枕名 5753、
▽ [名にこそ有りけれ] 5-295 袋草紙 167、5-383
十訓 81

(698:あ 17) 哀てふ ことの葉毎に おく露は むかし
をこふる 涙なりけり (古今/—)
1-1 古今 940、2-3 新撰和 333、3-5 小町 110、10-
177 定家八 1545、▽ [昔を忍ぶ] 2-8 新撰朗 440

(699:あ 18) ありはてぬ 命まつまの 程はかり う
き事しけく おもはずもかな (同/定文)
1-1 古今 965、2-3 新撰和 335、3-15 伊勢集 168、
5-223 時代不 89、5-264 和十種 12、5-302 歌色葉
53、10-177 定家八 1541、10-212 源氏注 380、10-
212 源氏注 480、10-212 源氏注 854、▽ [歎か
ずもがな] 5-270 後六々 77、5-291 俊頼髓 128、
5-416 大和 227、10-212 源氏注 1724、▽ [有りは
てん] [なげかずもがな] 5-332 悦目抄 97、▽ [い
とかく物を] 3-74 和泉続 647、▽ [ほどだにも] [な
げかずもがな] 10-212 源氏注 135、▽ [ながからぬ]
[なげかずもがな] 7-22 重之女 115

(700:あ 19) 逢にかへは 命をたにも すつへき
によしやあた名の たつは物かは
未詳

(701:あ 20) あわれけに うき時つるに 友もかな
人のなさは 世にありし程
未詳

(702:あ 21) あはれいかに ことしも暮ぬ 露の命
いけるはかりを おもひ出にして (新古今/俊恵法
師)
[本文注記] 初句「あはれいかに」の「あはれ」の
右に「歎つゝイ」あり。
▽ [なげきつつ] 2-12 月詣 1034、2-13 玄玉 452、

1-8 新古今 695、3-116 林葉 632

(703:あ 22) あひみても 猶なくさまぬ こゝろか
な 命やこひの かきりなるらん
▽ [猶行へなき] [思ひかな] 3-133 拾遺愚 290

(704:あ 23) 逢ふとみて 事そともなく 明にけり
はかなの夢の わすれかたみや (新古今/家隆)
5-183 三百六 666、5-217 家隆合 134、5-317 為兼抄 4、
5-399 家長記 122、10-206 歌林良 17、10-206 歌林
良 58、10-206 歌林良 384、▽ [あけぬなり] 1-8
新古今 1387、3-132 壬二 480、4-31 正治初 1483、
▽ [明けぬめり] 10-177 定家八

(705:あ 24) 朝かほゝ 何はかなしと おもふらん
人おも花の さこそみるらむ
3-80 公任 359、▽ [思ひけん] [人をも花は] [さ
こそ見るらめ] 1-3 拾遺集 1283、1-3' 拾遺抄 574、
2-7 玄玄 22、3-61 道信 18、5-270 後六々 73、5-301
古来風 385、5-374 今昔 96、▽ [おもひけむ] [ひ
とをも花は] [いかがみるらむ] 2-6 和漢朗 294

(706:あ 25) 哀なり うたゝねにのみ 見し夢の な
かきおもひに むすほおれつゝ (新古今/俊成)
[本文注記] 結句「むすほおれなん」の「なん」見
せ消ち。左傍書「つゝ」あり。
▽ [むすほおれなん] 1-8 新古今 1389、5-197 千五百
2289、10-177 定家八 1232

(707:あ 26) 哀とも いふへき人は おもほえて 身
のいたつらになりぬへきかな (百人一首/謙徳公)
1-3 拾遺集 950、3-50 一条撰 1、5-223 時代不 187、
5-275 百人秀 43、5-276 百人首 45、10-177 定家八
1407、10-178 八代秀 28、10-212 源氏注 1653、▽ [い
ふべき人も] 1-3' 拾遺抄 343

(708:あ 27) ありとみて なきこそ本の すかたな
れとはおもへとも ぬるゝ袖かな
未詳

(709:あ 28) 逢ふとても うれしからすの こよひ
かな あすの別を かねておもへは
未詳

(710:あ 29) 有明の つれなくみえし 別より 暁は
かり うき物はなし (古今/忠岑)

1-1 古今 625、2-4 古六帖 362、2-4 古六帖 3034、
2-8 新撰朗 393、3-13 忠岑 154、5-166 俊成合 54、
5-223 時代不 119、5-275 百人秀 24、5-276 百人首
30、5-277 定十体 6、5-294 奥儀 513、5-306 西行談
20、5-307 近代秀 86、5-308 詠歌大 93、5-320 竹園
抄 46、5-320 竹園抄 64、5-328 三五記 3、5-384 著
聞 207、7-6 忠岑 61、10-177 定家八 1069、10-178
八代秀 7、10-196 色葉和 746、10-206 歌林良 98

(711: あ 30) あとたえて 世をのかるへき 道なれ
や 岩さへこけの ころもきにけり (千載/仁和寺守
覚法親王)

▽ [衣きてけり] 1-7 千載 1107、2-12 月詣 863、4-2
守覚 126、6-31 題林愚 8653、10-177 定家八 170、▽ [道
なれば] 6-27 六華集 1815

(712: さ 1) 桜花 うつりにけりな とはかりを なけ
きもあえす つもる春かな (拾遺愚抄/定家)
3-133 拾遺愚 1737、5-216 定家合 20、▽ [とばかり
に] 4-41 御五十 507

(713: さ 2) さらに又 むすほおれ行 こゝろかな と
けなはとこそ おもひしかとも (山家抄/西行)
3-126 西行家 335

(714: さ 3) 桜花 とくちりぬとも おもほえす 人の
こゝろは 風もふきあえぬ (古今/貫之)
▽ [人の心ぞ] 1-1 古今 83

(715: さ 4) さゝ波や しかのみやこは あれにしを
むかしなからの 山桜かな (千載/忠のり)
1-7 千載 66、2-12 月詣 184、3-121 忠度 15、5-165
治承合 259、5-301 古来風 577、5-361 平家覚 59、
5-362 平家延 137、5-363 盛衰記 159、10-177 定家
八 103、10-181 歌枕名 5945

(716: さ 5) 櫻はな ちらは散なん ちらすとて 古郷
人の きても見なくに (古今/これたか)
1-1 古今 74、2-3 新撰和 71、5-235 新時代 19、5-274
秀歌大 23、5-291 俊頼髓 154、5-301 古来風 235、10-
177 定家八 146、10-211 伊勢注 412、10-211 伊勢注
470、▽ [ちらずとも] 2-4 古六帖 4201、5-329 桐火
桶 55

(717: さ 6) 桜花 おしみかねたる ゆふ暮は 涙も風
も ちるこゝちして (拾玉抄/慈圓)

▽ [夕ざれば] [涙もかぜに] 3-131 拾玉 1340

(718: さ 7) 先の世の 契りしらるゝ 身のうさに行
末かねて たのみかたさよ

5-421 源氏 31、5-249 物語合 291、▽ [たのめがた
さよ] 10-102 源氏合 70

(719: さ 8) 五月山 木すゑをたかみ ほとゝきすな
くね空なる 恋もするかな

1-1 古今 579、2-4 古六帖 87、3-19 貫之 594、10-
181 歌枕名 4492

(720: さ 9) 篠の葉に をく霜よりも ひとりぬる わ
か衣てそ さえまさりける (古今/友則)

1-1 古今 563、2-4 古六帖 668、3-11 友則 42、5-4 寛
平后 121、10-177 定家八 1139、10-212 源氏注 1503、
▽ [わがころもこそ] [さえまさりけれ] 2-2 新撰万
159

(721: さ 10) さりともと 思ふらんこそ かなしけ
れあるにもあらぬ 身をしらすして(伊勢物語/二
條の後)

5-415 伊勢語 121、1-9 新勅撰 866

(722: さ 11) さりともと まちし月日そうつり行 こゝ
ろの花の いろにまかせて (新古今/式子内親王)

1-8 新古今 1328、10-177 定家八 1309、▽ [色にま
がへて] 4-1 式子 313

(723: さ 12) 桜ちり 春の暮行 ものおもひ わすら
れぬへき 山ふきの花 (長秋抄/俊成)

▽ [物思ひも] 10-6 俊五社 119、1-14 玉葉 270、▽ [桜
ちる] [春もくれぬる] [物思ひも] 2-13 玄玉 611

(724: さ 13) 里はあれぬ 庭のさくらは ふりはてゝ
たそかれ時を とふ人もなし (拾遺愚抄/定家)

▽ [庭の桜も] 3-133 拾遺愚 1515、4-45 藤五百 71

(725: さ 14) 桜花 咲ぬる時は かつらきの 山のす
かたにかゝるしら雲 (壬二抄/家隆)

3-132 壬二 809、1-11 続古今 90、5-217 家隆合 22、
5-225 両卿撰 6、5-336 愚問賢 11、6-11 雲葉集 107、
10-181 歌枕名 2291

(726: さ 15) さひしさに 宿をたち出て 詠むれは
いつくもをなし 秋の夕くれ(百人一首/良暹法し)

5-276 百人首 70、1-4 後拾遺 333、5-223 時代不 100、
5-275 百人秀 58、6-27 六華集 635、10-125 釈教合
21、10-177 定家八 405、10-178 八代秀 33、10-206
歌林良 128

(727: さ 16) 桜ちる 木の下風は さむからて 空に
しられぬ 雪そふりける

1-3 拾遺集 64、1-3' 拾遺抄 42、2-3 新撰和 81、2-4
古六帖 4182、2-5 金玉 14、2-6 和漢朗 131、3-19
貫之 818、5-10 亭子合 13、5-52 前十五 1、5-251
秘蔵抄 4、5-264 和十種 45、5-266 三十人 17、5-267
三十六 16、5-268 深窓秘 25、5-291 俊頼髓 100、5-
295 袋草紙 336、5-295 袋草紙 442、5-295 袋草紙
555、5-301 古来風 348、5-329 桐火桶 145、5-330
和歌肝 13、5-331 和歌大 4、5-332 悦目抄 37、5-
334 口伝抄 1、5-339 耕雲口 10、7-7 貫之 43、10-
183 高良玉 52、10-201 和歌灌 15、▽ [桜咲く]
10-210 古今注 403

(728: さ 17) さひしさを いかにせよとて 岡邊な
る ならのはしたり 雪のふるらん (新古今/匡房)
1-8 新古今 670、5-248 和一字 575、6-31 題林愚 5907、
8-34 雲玉 311

(729: さ 18) 桜花 さきにし日より よしの山 空も
ひとつに かほるしら雲 (拾遺愚抄/定家)
3-133 拾遺愚 601、1-10 続後撰 74、5-216 定家合 13、
▽ [空もひとへに] 2-13 玄玉 506、▽ [かかるし
ら雲] 10-181 歌枕名 2038、▽ [かすむしらくも]
5-183 三百六 89

(730: さ 19) さらぬたに ぬる、袂を はるの夜の
かりのしのやの 雨もとまらず
▽ [かりのささやは] 4-26 堀河百 166

(731: さ 20) 五月雨は 宿につくまの あやめ草 軒
の雫に かれしとそおもふ
1-20 新後拾 210、4-26 堀河百 386、▽ [くちじと
ぞ思ふ] 10-181 歌枕名 6332

(732: さ 21) 澤におふる わかなならねと いたつ
らに 年をつむにそ 袖はぬれける
▽ [としをつむにも] [袖はぬれけり] 1-8 新古今
15、3-129 長秋 106、5-363 盛衰記 143、▽ [色を
つむにも] [袖はぬれけり] 2-13 玄玉 479

(733: さ 22) 桜さく とを山とりの したりをの な
かへし日も あかぬいろかな (新古今/太上天王)
1-8 新古今 99、4-18 後鳥羽 1632、5-223 時代不 278、
5-278 自讃歌 1、5-307 近代秀 30、5-308 詠歌大 8、
5-334 口伝抄 8、10-123 新三撰 2、10-177 定家八
99、10-178 八代秀 71、10-206 歌林良 101

(734: さ 23) さ月まつ 花たちはなの 香をかけは
むかしの人の 袖のかそする (伊勢物語/業平)
1-1 古今 139、2-3 新撰和 127、2-4 古六帖 4255、2-
6 和漢朗 173、5-292 綺語抄 730、5-293 童蒙 682、
5-294 奥儀 453、5-302 歌色葉 236、5-329 桐火桶 70、
5-331 和歌大 6、5-332 悦目抄 39、5-369 曾我仮 3、
5-415 伊勢語 109、10-177 定家八 208、10-196 色
葉和 502、10-212 源氏注 929、10-212 源氏注 1439

(735: さ 24) さくら花 咲はまつみんと おもふま
に 日数へにける 春の山さと
▽ [日数へにけり] 1-8 新古今 80、6-31 題林愚 871

(736: さ 25) 五月雨の 月はつれなき 深山より ひ
とりも出る ほと、きすかな (新古今/定家)
1-8 新古今 235、3-133 拾遺愚 1793、5-184 老若合
145、5-216 定家合 32

(737: さ 26) 桜ちる 春の山邊は うかりけり 世を
のかれにと こしかひもなく
1-8 新古今 117、3-56 恵慶 54、5-335 井蛙 200、▽ [さ
くらさく] 5-277 定十体 46

(738: さ 27) 五月雨の 雲のたえまを 詠めつ、ま
とよりにしに 月をまつかな
1-8 新古今 233、6-6 御裳集 242

(739: さ 28) さくら色の 庭の春かせ あともなし
とははそ人の 雪とたに見ん
1-8 新古今 134、3-133 拾遺愚 1016、5-197 千五百
470、5-216 定家合 18、10-177 定家八 159

(740: さ 29) さ月やみ みしかき夜半の うた、ね
に 花たちはなの 袖にす、しき (新古今/慈圓)
1-8 新古今 242、3-131 拾玉 5748、5-184 老若合 143

(741: さ 30) 桜花 夢かうつ、か しら雲の たえて
つれなき 峯の春風 (新古今/家隆)
3-132 壬二 1698、5-217 家隆合 27、5-314 詠歌一

63、10-177 定家八 173、10-206 歌林良 77、▽ [たえてつねなき] 1-8 新古今 139、5-184 老若合 77、5-278 自讃歌 111

(742: き 1) 君によりおもひならひの世中を人はこれおや恋といふらん (伊勢物語 / 業平)
[本文注記] 第二句「おもひならひの」の「の」の右に傍書「ぬイ」あり。
▽ [思ひならひぬ] [世の中の] 5-415 伊勢語 73、1-11 続古今 944、2-15 万代 1751

(743: き 2) きり〜すいたくな鳴そ秋の夜のなかきおもひは我のみそます (古今 / 忠房)
▽ [我ぞまされる] 1-1 古今 196、2-4 古六帖 3987、2-6 和漢朗 333、5-270 後六々 137、5-329 桐火桶 82、5-385 撰集抄 70

(744: き 3) 君やこし我や行けんおもほえず夢かうつゝかねてか覚てか (伊勢物語 / 斎宮)
1-1 古今 645、2-4 古六帖 2036、3-6 業平 48、5-299 袖中抄 255、5-415 伊勢語 126、10-206 歌林良 76、▽ [おぼつかな] 7-2 業平 3、5-291 俊頼髓 193

(745: き 4) きくやいかにうはの空なる風たにも松にほとふるならいありとは (新古今 / 宮内)
▽ [まつにおとする] 1-8 新古今 1199、5-194 水無瀬 141、5-195 若宮建 27、5-196 桜宮合 27、5-273 続歌仙 112、5-277 定十体 199、5-278 自讃歌 90、10-123 新三撰 230、10-124 女房合 12、▽ [松に音する] [ならひ有りせば] 6-31 題林愚 7470

(746: き 5) 君まつとねやへもいらぬまきの戸にいたくなふけそ山のはの月 (新古今 / 式子内親王)
1-8 新古今 1204、4-1 式子 321、5-277 定十体 258、5-278 自讃歌 15、6-31 題林愚 6636、10-124 女房合 6

(747: き 6) 昨日見し人はととへはけふはなしあすまたわれはたれにとわれん
▽ [人はいづらは] [あすとはたれか] [世をおもふべき] 5-397 昇霞記 64

(748: き 7) 君かせぬ我手枕は草なれや涙の露の夜な〜そをく (新古今 / 光孝天王)
1-8 新古今 1349、5-235 新時代 45、10-177 定家八 1291、▽ [よなよなにおく] 3-38 仁和 11

(749: き 8) きふといひけふとくらし明日か、はなかれてはやき月日なりけり
1-1 古今 341、2-3 新撰和 158、2-4 古六帖 247、5-329 桐火桶 126、6-31 題林愚 6082、10-177 定家八 572、▽ [けふとくらしつ] 10-180 五代枕 1214、▽ [日かざなりけり] 10-181 歌枕名 3187

(750: き 9) 君に我うとく成にし其日より袖にしたしき月のかけかは
▽ [月のかけかな] 2-16 夫木 17255、3-130 月清 1419

(751: き 10) 清たきの瀬せのしら糸くりためて山分ころもおりてきましを (古今 / 神たい法し)
1-1 古今 925、2-4 古六帖 1702、10-177 定家八 1684、10-180 五代枕 1418、10-181 歌枕名 1261

(752: き 11) 君まさてけふりたえにししほかまのうらさひしくも見えわたるかな
1-1 古今 852、3-19 貫之 771、5-266 三十人 20、5-267 三十六 19、5-292 綺語抄 387、5-374 今昔 129、10-177 定家八 686、10-180 五代枕 1114、10-181 歌枕名 7281、10-206 歌林良 661、10-211 伊勢注 402、▽ [君なくて] 2-4 古六帖 2498、5-299 袖中抄 240、5-375 古本説 57、▽ [きみなくて] [なりにけるかな] 2-6 和漢朗 538

(753: き 12) きかてたゝねなまし物を郭公中〜なりや夜半の一聲
1-8 新古今 203、3-89 相模 47

(754: き 13) 君見ればむすふの神そおもわるゝつれなき人を何つくりけん
▽ [うらめしき] 1-3 拾遺集 1265

(755: き 14) きふたとわんとおもひしつこの國のいくたの森に秋は来にけり (壬二抄 / 家隆)
[本文注記] 第四句「いくたの森に」の「に」は紙の擦れによる判読文字。
1-8 新古今 289、3-132 壬二 136、5-217 家隆合 45、5-273 続歌仙 35、5-277 定十体 241、5-278 自讃歌 115、5-304 瑩玉集 13、5-345 心敬私 41、10-177 定家八 271、10-181 歌枕名 4127、10-206 歌林良 155

(756: き 15) 君かうる涙しなくはからころもむねのあたりは色もえなまし (古今 / つら之)

▽ [君こふる] 1-1 古今 572、2-4 古六帖 2088、3-19 貫之 578、10-177 定家八 1329、▽ [ひとをおもふ] [むねのわたりは] 2-2 新撰万 458

(757: き 16) 君やあらぬ わか身やあらぬ おほつかな たのめし事のみなかはりゆく (千載/俊恵法師)
[本文注記] 結句「みなかはりゆく」の「ゆく」に右傍書「イぬる」あり。

▽ [みなかはりぬる] 1-7 千載 927、3-116 林葉 696、5-156 清輔合 57、10-177 定家八 1391、▽ [契りし事の] [みなかはりぬる] 5-165 治承合 338

(758: き 17) きふまでよそにしのひし下萩の末葉の露に秋かせそふく
1-8 新古今 298、4-15 明日香 889、5-184 老若合 210

(759: き 18) 君かため春の野に出て若葉つむ我か衣手に雪はふりつゝ (古今/仁和御かと)
1-1 古今 21、2-3 新撰和 29、2-4 古六帖 45、2-8 新撰朗 32、3-38 仁和 1、5-235 新時代 43、5-274 秀歌大 11、5-275 百人秀 18、5-276 百人首 15、5-277 定十体 161、5-308 詠歌大 2、5-344 東野州 144、10-177 定家八 19

(760: き 19) 桐の葉もふみ分かたくなりけりかならず人をまつとなけれと (新古今/式子内親王)
1-8 新古今 534、4-1 式子 255、4-31 正治初 257、5-183 三百六 440、5-278 自讃歌 14、5-345 心敬私 28、6-27 六華集 881、10-123 新三撰 74、10-124 女房合 5、10-177 定家八 454

(761: き 20) きみかためおしからさりし命さへ長くもかなとおもひけるかな (百人一首/藤原義孝)
5-235 新時代 128、5-270 後六々 117、5-276 百人首 50、6-12 別兼作 431、10-177 定家八 1049、▽ [おもひぬるかな] 1-4 後拾遺 669、5-275 百人秀 49、3-52 義孝 12

(762: き 21) きえねたゝしのふの山の峯の雲かゝるころのあともなきまで (新古今/雅経)
4-15 明日香 1093、5-278 自讃歌 183、5-334 口伝抄 9、10-181 歌枕名 6929、▽ [かへる心の] 1-8 新古今 1094、▽ [あとのなきまで] 10-123 新三撰 256

(763: き 22) 君かため手おれる枝は春なからかくこそ秋の紅葉しにけれ (伊勢物語/業平)
5-415 伊勢語 34、1-14 玉葉 1614

(764: き 23) きりゝすなくや霜夜のさむしろにころもかたしきひとりかもねん (月清抄/後京極)
1-8 新古今 518、3-130 月清 751、4-31 正治初 455、5-275 百人秀 95、5-276 百人首 91、5-335 井蛙 131、10-177 定家八 441、10-178 八代秀 74、10-206 歌林良 66

(765: き 24) 君のみと分てもいまはつらからすかゝるものおもふ世をそうらむる (拾遺愚抄/定家)
3-133 拾遺愚 283

(766: き 25) 聞明す涙の露もとゝまらず老のね覚の萩のうは風 (壬二抄/家隆)
3-132 壬二 2337、1-18 新千載 1756、2-15 万代 896、▽ [なみだのつゆを] 6-17 閑月集 179

(767: き 26) 君といへはおつる涙にくらされて恋しつらしと分かたもなし (拾遺愚抄/定家)
3-133 拾遺愚 166

(768: き 27) きえ帰り物そかなしききりゝす菊のかきねの秋のゆふ霜 (壬二抄/家隆)
[本文注記] 結句「秋のゆふ露」の「露」見セ消チ。下に「霜」あり。
3-132 壬二 2523

(769: き 28) 君ゆへにいとふもかなしかねの聲やかてわか世もふけにし物を (月清抄/後京極)
3-130 月清 370、5-175 六百番 847、6-31 題林愚 7178

(770: き 29) 清見かた我かよひちのせきなれやうちぬる人の波のよるゝ (壬二抄/家隆)
▽ [うちぬる人も] 3-132 壬二 585、5-197 千五百 2525

(771: き 30) きえぬるかきえぬにもまた身をなしてふしのけふりに春のあけほの (拾玉抄/慈圓)
3-131 拾玉 1987

(772: ゆ 1) ゆらの戸をわたる舟人かちをたえ行

ゑもしらぬ 恋のみちかな (新古今/好忠)
3-58 好忠 410、5-275 百人秀 47、5-276 百人首 46、
5-307 近代秀 78、5-428 住吉真 24、10-177 定家八
967、10-181 歌枕名 8701、▽ [恋のみちかも] 1-8
新古今 1071

(773:ゆ2) 夕されは 玉ちる野邊の 女郎花 枕さた
めぬ 秋かせそふく
1-8 新古今 338、5-197 千五百 1134、▽ [まくらさ
だめず] 5-273 続歌仙 2

(774:ゆ3) 行ほたる 雲のうへまで いぬへくは 秋
風ふくと かりにつけこせ (伊勢物語/業平)
5-415 伊勢語 84、1-2 後撰 252、2-4 古六帖 4011、
3-6 業平 10、5-300 六陳状 32、7-2 業平 58、▽ [と
ぶほたる] [行くべくは] 6-27 六華集 808

(775:ゆ4) ゆきやらぬ 夢路をたとる 袂には あま
つ空なる 露やおくらん (同/同)
▽ [夢路をたのむ] 5-415 伊勢語 100、▽ [夢ぢ
にまどふ] [あまつそらなき] [露ぞおきける] 1-2
後撰 559

(776:ゆ5) 行水にかすかくよりも はかなきは お
もわぬ人をおもふなりけり (伊勢物語/小町)
1-1 古今 522、5-294 奥儀 505、5-302 歌色葉 253、
5-415 伊勢語 95、10-177 定家八 962

(777:ゆ6) 夕暮に 命かけたる かけろふの 有やあ
らすやとふもはかなし (新古今/一)
[本文注記] 初句「夕暮に」の「に」の右に「のイ」
あり。
1-8 新古今 1195、▽ [心かけたる] [とふもあやふ
し] 7-19 時明 8

(778:ゆ7) 行やらて 山路くらしつ ほとゝきす い
まひと聲の きかまほしさに
1-3 拾遺集 106、1-3' 拾遺抄 69、2-4 古六帖 4443、
2-5 金玉 23、2-6 和漢朗 184、3-20 公忠 8、5-52 前
十五 9、5-166 俊成合 50、5-235 新時代 92、5-264
和十種 27、5-265 和十体 12、5-266 三十人 62、5-
267 三十六 77、5-268 深窓秘 29、5-291 俊頼髓 165、
5-294 奥儀 116、5-346 兼載談 59、5-355 大鏡 54、▽ [い
ま一声を] 10-210 古今注 460

(779:ゆ8) 夢にても 見ゆらん物を なけきつゝ う

ちぬるよひの 袖のけしきは (新古今/式子内親王)
1-8 新古今 1124、4-1 式子 274、4-31 正治初 276、
5-277 定十体 239、5-278 自讃歌 16、5-327 愚秘抄 9、
5-328 三五記 164、5-329 桐火桶 215、10-123 新三
撰 77

(780:ゆ9) 夢とても 人にかたるな しるといへは
手枕ならぬ まくらたにせず (同/伊勢)
1-8 新古今 1159、2-4 古六帖 2977、3-15 伊勢集 323、
6-27 六華集 1490

(781:ゆ10) ゆかむ人 こむ人しのへ 春かすみ 龍
田の山のはつさくらかな (同/家持)
▽ [はつ桜花] 1-8 新古今 85、3-3 家持 57、10-177
定家八 89、10-181 歌枕名 2374

(782:ゆ11) 夕つく夜 しほみちくらし 難波江や
あしの若葉を こゆるしらなみ (同/秀能)
[本文注記] 初句「夕つく夜」の「つ」の右に「月
イ」あり。
▽ [難波江の] 5-203 元久合 68、5-277 定十体 163、
5-278 自讃歌 151、5-328 三五記 103、7-81 如願 352、
10-122 三六合 28、10-123 新三撰 351、10-181 歌枕名
3552、▽ [なには江の] [あしのわかばに] 1-8 新
古今 26、5-273 続歌仙 92

(783:ゆ12) 夢をたに いかてかた見に みてしか
な あはてぬる夜の なくさめにせん (一/人丸)
1-3 拾遺集 808、1-3' 拾遺抄 262、10-177 定家八 1220

(784:ゆ13) 夢かとも 見しおも影も 契りしも わ
すれすなから うつゝならねと (新古今/俊成女)
[本文注記] 結句「うつゝならねと」の「と」の右
に「は」あり。

▽ [うつゝならねば] 1-8 新古今 1391、4-19 俊成女
206、5-192 仙影合 67、5-235 新時代 126、5-273 続
歌仙 105、5-277 定十体 33、5-278 自讃歌 80、5-329
桐火桶 218、6-31 題林愚 6913、10-123 新三撰 219、
10-124 女房合 23、10-177 定家八 1312

(785:ゆ14) ゆふされは ほたるよりけに もゆれ
とも ひかり見ねはや 人のつれなき (古今/友則)
1-1 古今 562、2-2 新撰万 69、2-4 古六帖 4013、3-
11 友則 12、5-166 俊成合 28、5-223 時代不 97、10-
177 定家八 996、10-206 歌林良 238、10-212 源氏
注 1122、10-196 色葉和 653、▽ [もゆるとも] [光

みえねば] [人ぞつれなき] 5-4 寛平后 58

(786:ゆ 15) 夢のうちに 逢見ん事を たのみつゝ
くらせる夜るはねん方もなし (古今/一)

▽ [くらせるよひは] 1-1 古今 525、2-4 古六帖 2043、
10-177 定家八 1223

(787:ゆ 16) 雪ふれは 冬こもりせる 草も木も 春
にしられぬ 花そさきける (古今/貫之)

1-1 古今 323、2-4 古六帖 727、5-329 桐火桶 120、
10-177 定家八 554

(788:ゆ 17) 夢にたにあふ夜まれなる 都人 ねら
れぬまゝに 遠さかりゆく (月清抄/後京極)

▽ [ねられぬ月に] [とほざかりぬる] 3-130 月清
1543、1-20 新後拾 904、5-259 三体和 12、▽ [ね
られぬ月に] 10-211 伊勢注 217

(789:ゆ 18) ゆき暮て 木の下かけを 宿とせは 花
やこよひのあるしならまし (一/忠則)

3-121 忠度解 1、5-361 平家覚 77、5-362 平家延 289、
5-363 盛衰記 193

(790:ゆ 19) 行人を おもひそわたる あつまちや
かすみかゝれる さのの舟はし (壬二抄/家隆)

3-132 壬二 1743、10-137 道五十 51

(791:ゆ 20) 夕暮は いつれの雲の 名残とて 花た
ちはなに 風の吹らん (新古今/定家)

1-8 新古今 247、3-133 拾遺愚 1744、4-41 御五十
514、10-123 新三撰 200

(792:め 1) めにたゝぬ かきねにまじる かのの葉
も 道行人の手にならずとき (拾遺愚抄/定家)

▽ [めにたてぬ] 3-134 拾員外 640

(793:め 2) めもあはぬ 草の廬りにいとゝしくあ
られふるなり 小野の山里 (拾玉抄/慈圓)

3-131 拾玉 859

(794:め 3) めもはるにもえては見えし むらさき
の色こき野邊の 草木なりとも (拾遺愚抄/定家)

3-133 拾遺愚 1563、4-45 藤五百 311、8-34 雲玉 341

(795:め 4) めくりあはん かきりはいつと しらね
とも 月なへたてそよそのうき雲 (新古今/後京極)

1-8 新古今 1272、3-130 月清 886、5-197 千五百 2582、
5-278 自讃歌 28

(796:め 5) めくり逢て 見しやそれとも わかぬ間
に雲かくれにし 夜半の月影 (同/紫式部)

1-8 新古今 1499、3-72 紫集 1、5-276 百人首 57、
▽ [夜半の月かな] 5-275 百人秀 64、10-124 女房
合 63、10-177 定家八 1615、▽ [めぐりきて] [夜
半の月かな] 10-212 源氏注 1778

(797:め 6) めにはみて 手にはとられぬ 月の内の
かつらのことき 君にそありける (伊勢物語/業平)
5-415 伊勢語 133、5-293 童蒙 696、▽ [いもにも
あるかな] 2-4 古六帖 4288、▽ [いもをいかにせむ]
1-9 新勅撰 953、▽ [てにはとらえぬ] [いもをい
かにせむ] 2-1 万葉 635

(798:め 7) めつらしき 君かよどのにあやめ草引
くらふへき物のなきかな

▽ [君がよどのの] 4-26 堀河百 395、10-181 歌枕
名 1470

(799:め 8) めかるとも おもほえなくに 忘らるゝ
時しなれば おもかけにたつ

5-415 伊勢語 86、2-4 古六帖 2061、▽ [おもかげ
にみゆ] 7-2 業平 95、▽ [わかるとも] [おもかげ
に見ゆ] 3-6 業平 30、▽ [わかるとも] [おもほえ
ぬかな] [おもかげにみつ] 7-2 業平 59

(800:め 9) めつらしく けふ立そむる 鶴の子は
千代のむつきをかさぬへきかな

1-6 詞花 162、2-9 後葉 234、▽ [はるたちそむる]
3-86 伊大輔 108、7-32 伊大輔 115

(801:め 10) めつらしき 聲ならなくに 時鳥 こゝ
らの年をあかすもあるかな (古今/そせい)

1-1 古今 359、3-11 友則 9、5-35 円融扇 4、10-196
色葉和 699、▽ [そこのとしを] 2-3 新撰和 139、
▽ [ここのとしの] 6-3 継色紙 13

(802:み 1) 見初にし 時より君を 忘れねは 日に一
たひも おもひ出さず

未詳

(803:み 2) 身をしれは 人のとかとは 思わぬに う
らみかほにも ぬるゝ袖かな (新古今/西行)

〔本文注記〕第三句「思わねと」の「ねと」見せ消チ。右傍書「ぬに」あり。

1-8 新古今 1231、3-126 西行家 324、▽〔人のとがとも〕5-173 宮河合 67、▽〔人のとがには〕3-125 山家 680、5-386 西行文 129

(804:み3) 身をつみて人のいたさそ 思わるゝ恋
しかりけり 恋しかるへし
未詳

(805:み4) 見し夢のおもひ出らるゝよひ毎にい
はぬをしるは 涙なりけり
1-2 後撰 825、2-4 古六帖 2653、3-15 伊勢集 214、
10-177 定家八 1071、2-4 古六帖 2055、▽〔折ごとに〕
5-301 古来風 329

(806:み5) みるめこそ入ぬる磯の草ならめ袖さ
え波のしたにくちぬる (新古今/二條院)
1-8 新古今 1084、10-177 定家八 927、10-206 歌林
良 18、10-206 歌林良 89

(807:み6) 身の程をおもひしりぬる 事のみそつ
れなき人の なさけなりけり
▽〔事のみや〕〔なさけなるらん〕1-5 金葉二 715、
1-6 詞花 209、2-9 後葉 348

(808:み7) 身をしらて人を恨むる こゝろこそち
る花よりもはかなかりけれ
〔本文注記〕結句「はかなけれ」の「な」と「け」
との間に挿入記号。右傍書「かり」あり。
1-6 詞花 279、2-9 後葉 521、3-87 入道右 22

(809:み8) 見る人もなき山里のさくらはな 外の
ちりなんのちそさかまし (古今/伊勢)
1-1 古今 68、2-3 新撰和 49、2-4 古六帖 4207、3-
15 伊勢集 104、5-297 万葉時 8、5-325 和歌用 19、
5-329 桐火桶 54、▽〔なきわがやどの〕10-212 源
氏注 70

(810:み9) 身のうさをなけくにあかて 明る夜は
とりかさねてそ音もなけれける
5-421 源氏 20、5-250 風葉 886、10-102 源氏合 97

(811:み10) みても又またも見まくのほしけれ
はなるゝを人はいとふへらなり (古今/一)
1-1 古今 752、5-294 奥儀 194、10-177 定家八 1176

(812:み11) 見し人のけふりを雲と詠むればゆ
ふへの空もむつまじきかな
5-421 源氏 36、▽〔煙を雲に〕5-444 無名草 7

(813:み12) みしはなくあるはかなしき世のはて
をそむししかひもなくへそふる (源し/入道の
宮)
〔本文注記〕第二句「あるはかなしき」の「なし」
の右傍書「いいなき」あり。
5-421 源氏 178、10-102 源氏合 29

(814:み13) 水をたにむすひもいれぬ 我身より
なにか涙となりていつらん
▽〔身のうさに〕〔成りて落つらん〕8-10 草根 8201

(815:み14) みよし野の山よりふかき物やある
とこゝろにとへは心なりけり (月清抄/後京極)
3-130 月清 156

(816:み15) 身をすつる人は誠にすつるかは捨
ぬ人こそすつるなりけれ (山家抄/西行)
1-6 詞花 372、▽〔世をすつる〕3-126 西行家 535、
5-386 西行文 27、▽〔世をすつる〕〔すてぬ人をぞ〕
〔すつるとはいふ〕5-387 西行阿 26、▽〔世をすつる〕
〔すつる我が身は〕〔すてぬ人をぞ〕〔すつるとは見
る〕5-388 沙石 121

(817:み16) 見しはみな夢のたゝちにまかひつゝ
昔は遠く人は帰らず (拾遺愚抄/定家)
3-134 拾員外 494

(818:み17) みちのくのしのふもちすりたれ故
にみたれ初にし我ならなくに (伊勢物語 古今に
も/左大臣)
2-4 古六帖 3312、5-276 百人首 14、5-291 俊頼髓
287、5-292 綺語抄 513、5-293 童蒙 474、5-299 袖
中抄 209、5-301 古来風 280、5-415 伊勢語 2、7-2
業平 61、10-177 定家八 853、10-196 色葉和 894、
▽〔みだれむと思ふ〕1-1 古今 724、5-275 百人秀
17、5-296 和歌初 122、5-299 袖中抄 916、10-180
五代枕 1768、10-181 歌枕名 6906、10-206 歌林良
601

(819:み18) みるめかる方やいつこそさほさして
われにをしへよあまのつり舟 (伊勢物語/業平)
5-415 伊勢語 129、10-210 古今注 482、10-212 源

氏注 1547、▽ [方やいづくぞ] 1-8 新古今 1080

(820：み 19) みよし野は山もかすみて白雪のふりにし里に春はきにけり (新古今 / 太上天王)

1-8 新古今 1、3-130 月清 402、5-178 後京極 2、5-277 定十体 144、5-278 自讃歌 21、5-328 三五記 97、10-177 定家八 4、10-181 歌枕名 2171、10-206 歌林良 54、▽ [みよし野の] 5-183 三百六 2、10-123 新三撰 81

(821：み 20) みよし野の山の秋かせさ夜ふけて古郷さむく衣うつなり (百人一首 / 参議雅經)

1-8 新古今 483、4-15 明日香 344、5-275 百人秀 97、5-276 百人首 94、10-177 定家八 381、10-181 歌枕名 2179

(822：み 21) 見わたせはひらのたかねに雪きえてわかなつむへく野は成にけり

1-10 続後撰 34、2-6 和漢朗 17、2-8 新撰朗 591、2-15 万代 50、5-24 麗景合 11、10-181 歌枕名 6131

(823：み 22) みる人もなくてちりぬるをく山のもみちは夜ののにしきなりけり (古今 / 貫之)

[本文注記] 第三句「をくら山の」の「ら」見セ消チ。
1-1 古今 297、2-3 新撰和 82、2-4 古六帖 4063、2-5 金玉 30、2-6 和漢朗 316、5-266 三十人 16、5-267 三十六 15、5-268 深窓秘 54、5-292 綺語抄 502、5-293 童蒙 407、5-294 奥儀 158、5-294 奥儀 477、5-329 桐火桶 110、10-212 源氏注 92

(824：み 23) みな人のそむきはてぬる世中にふるのやしろの身をいかせん (新古今 / 女御薺子王女)

▽ [身をいかにせん] 1-8 新古今 1796、2-10 続詞花 899、3-30 斎女御 259、5-277 定十体 251、10-212 源氏注 1693

(825：み 24) 見ぬ人にいかてかたらんくちなしのいわての里の山ふきのはな

▽ [いかがかたらむ] 1-9 新勅撰 126、10-181 歌枕名 6976

(826：み 25) 水のおもにてる月なみをかそふれはこよひそ秋のも中なりける

1-3 拾遺集 171、1-3' 拾遺抄 115、2-6 和漢朗 251、5-52 前十五 26、5-166 俊成合 77、5-223 時代不 201、

5-266 三十人 86、5-267 三十六 104、5-268 深窓秘 45、5-293 童蒙 147、5-301 古来風 359、6-16 和漢兼 719、▽ [池の面に] 3-29 順集 289

(827：み 26) み吉野も花見し春のけしきかは時雨る、秋のゆふ暮のそら (拾遺愚抄 / 定家)

3-133 拾遺愚 353

(828：み 27) みしか夜もまたふしなれぬあしの屋のつまもあらはに明るしの、め(壬二抄 / 家隆)

▽ [みじかよに] 3-132 壬二 1848、▽ [みじか夜の] 1-9 新勅撰 1284、5-261 最勝四 77、10-181 歌枕名 3759、▽ [みじか夜の] [蘆のやや] 5-217 家隆合 39

(829：み 28) 三か月の秋ほのめかすゆふ暮は心に萩の風そこたふる (月清抄 / 後京極)

3-130 月清 51

(830：み 29) みよし野は花にうつろふ山なれば春さへみゆきふる里の空 (拾遺愚抄 / 定家)

3-133 拾遺愚 1919、1-10 続後撰 134、5-216 定家合 17、5-261 最勝四 16、10-181 歌枕名 2176

(831：み 30) 三か月のほのめく空に秋をこめてそ、ろにわたる山のはの雲 (拾玉抄 / 慈圓)

3-131 拾玉 5755、▽ [そぞろきわたる]、2-16 夫木 17239、5-184 老若合 213、10-204 了俊日 42

3. 解題

本稿で採り上げた 150 首の歌のうち、見セ消チや挿入記号、傍書などの注記は 16 首の歌に見出される。

このうち、半丁の最初の行に下句を、また最終行に上句を記した上で、両者をつなぐ意で用いられたと思われる「○」印が (682：あ 1) (692：あ 11) に見える。同様の例は、これまでにも、(467：む 26) (592：ま 11) に見られた。そこでも指摘したように、親本の喉(綴じ目)が開きにくく、当該面の最終行まで筆写してから、最初の一行目の欠落に気付いたための処置かと推察される。

また、見セ消チを伴う傍書は、5 首の歌、計 6 箇所にある。このうち 5 箇所については、修正後の本文が他出歌集の本文に一致するが、(706：あ 25) は、本行の本文が他出歌集に一致する。

傍書の出所は未詳である。

また、異文傍書は8首の歌に見られる。(784:ゆ13)には「イ」の文字はないが、その他は、「イ……」あるいは「……イ」という形式で示されている。傍書が他出本文と一致することが多いが、(777:ゆ6)は本行本文の方が他出と同じである。なお、(782:ゆ11)の傍書は、初句「夕つく夜」の仮名表記部分「つく」に漢字「月」を充てたものである。「イ」とあるように、異文として注記していることから推すと、「夕づき夜」として区別する意図があったか。また、(691:あ10)の第二句にある「閑路」の「路」は、正しくは副助詞「し」とあるべき箇所である。この漢字の充て方は、通常の解釈とは異なる。

次に『新編国歌大観』に他出が唯一である歌をまとめると、次のようになる。

1-1 古今	1 首
1-3 拾遺集	1 首
3-126 西行家	1 首
3-130 月清	2 首
3-131 拾玉	3 首
3-132 壬二	1 首
3-133 拾遺愚	4 首
3-134 拾員外	2 首
4-26 堀河百	1 首
8-10 草根	1 首

『拾遺愚草』に『拾遺愚草員外』を加えると、藤原定家の私家集の歌が6首あり、また、慈円『拾玉集』や藤原良経『秋篠月清集』など、いわゆる六家集の用例が目立つのは、前稿までの考察と同様の傾向である。なお、本稿の範囲ではわずかに1首ながら、『堀河百首』といった百首歌に対する目配りにも留意しておきたい。

なお、「昨日見し人はととへはけふはなしあすまたわれはたれにとわれん」(747:き6)という歌は、『高倉院昇霞記』(源通親作。『新編国歌大観』解題(久保田淳氏)によれば、養和2年(1182)1月以降の成立)「昨日みし人はいづらはけふはなしあすとはたれか世をおもふべき」(64番)に酷似する。同一歌と見るにすれば本文異同が少なくないが、両者が全く無関係に詠まれたとも解しにくい。本書の撰歌範囲を考える上で、看過できない用例であろう。

次に、集付を確認したい。集付の数をまとめる

と、以下のとおりである。

「新古今」	28 箇所
「古今」	19 箇所
「伊勢物語」	17 箇所
(うち「古今にも」と並記する箇所)	1 箇所
「拾遺愚抄」	10 箇所
「壬二抄」	7 箇所
「百人一首」	6 箇所
「月清抄」	4 箇所
「拾玉抄」	4 箇所
「千載」	3 箇所
「山家抄」	2 箇所
「長秋抄」	1 箇所
「源し」	1 箇所

勅撰集としては、「新古今」「古今」の集付が多く、私家集ではやはり定家の「拾遺愚抄」が目立つ。また、「伊勢物語」の名が多く見られることも、これまでと同様の傾向である。

作者名は102箇所に記され、ほぼ正確である。だが、作者名の一部が欠落している例がある。すなわち、(745:き4)において、「宮内卿」を「宮内」とする。さらに、(818:み17)の「左大臣」も、正確には「河原左大臣」とあるべきところであろう。さらに、(806:み5)では、「二条院讃岐」を「二條院」としており、これは明らかに誤りである。また、(820:み19)の作者は、正しくは「摂政太政大臣」とあるところを、「太上天王」としている。これは、『新古今集』において、当該歌の次に配された2番歌の作者名と見誤ったものと推察される。

なお、(801:め10)は、『友則集』にも載る歌ではあるが、集付を「古今」としていることから窺えるように、『古今集』における配列によって、3首前の作者名(素性)を当該歌の作者と判断したのであろう。

一方、「さゝ波やしかなのみやこはあれにしをむかしなからの山桜かな」(715:さ4)は、集付を「千載」としながら、作者名を「忠のり」と明記する。この歌は、『千載集』では詠み人知らずとして扱われていることでも有名な歌であるが、忠度歌であることは、『平家物語』をはじめ、『月詣集』からも知られる。『定家八代抄』『歌枕名寄』が、『千載集』本文そのままに、作者名を詠み人知らずとして採歌するのは一線を画し、本書に

は、作者名が特定できれば採り入れていくという姿勢が見受けられる。

同様に、『伊勢物語』についても、本書には、物語本文に明記されない作者名を記す傾向がある。本稿で採り上げた範囲には、『伊勢物語』の歌が集中的に見出されるが、とくに、(682:あ1)～(686:あ5)の5首と(774:ゆ3)～(776:ゆ5)の3首、(818:み17)(819:み18)の2首は、複数の『伊勢物語』歌が連続して収められており、本書の『伊勢物語』撰取の度合いの大きさがわかる。これらの『伊勢物語』の歌の作者名について、問題になる歌は6首に及ぶ。以下、具体的に考察していく。なお、古注釈は、書陵部本および島原文庫本『和歌知頭集』の他、『冷泉家流伊勢物語抄』『伊勢物語愚見抄』『伊勢物語肖聞抄』『伊勢物語宗長聞書』『伊勢物語闕疑抄』(片桐洋一氏『伊勢物語の研究〔資料篇〕』(昭和44年1月、明治書院)所収。)と、『十卷本伊勢物語注』『増纂伊勢物語抄』『伊勢物語奥秘書』(以上、片桐洋一氏・山本登朗氏責任編集『伊勢物語古注釈大成』第一巻(2004年10月、笠間書院)所収。)を参看する。

まず、『伊勢物語』第十七段「あたなりと名にこそたてれ 桜花 年にまれなる 人もまちけり」(684:あ3)は、本書では有常女の歌になっている。この歌は、『古今集』では読み人知らずであり、そのことを『伊勢物語愚見抄』は指摘する。また、『伊勢物語肖聞抄』では「あるじの女、誰ともなし。」とし、女性であることは認めるが、人物は特定しない。作者について特に言及しないのは、『伊勢物語宗長聞書』『伊勢物語闕疑抄』である。一方、有常女とする古注釈には、書陵部本および島原文庫本『和歌知頭集』の他、『冷泉家流伊勢物語抄』『十卷本伊勢物語注』『増纂伊勢物語抄』がある。なお、『伊勢物語奥秘書』には、この段の「年ごろおとづれざりける人」を「中将(業平)」、「あるじ」を有常女としながらも、「一説、此歌、有常か女の歌と云り。あやまりなるへし。此物語の内に、女房の歌をは、皆、題書に女と書なり。此歌には、女の字なし。たゞ有常か事なるかと云々。」とあり、当該歌の作者は有常女ではなく有常かと述べている。

また、「秋の夜の ちよを一夜に なせりとも ことはのこりて 鳥やなきなん」(685:あ4)では、作者を染殿とする。『続古今集』や『万代集』は読み人知らずであり、書陵部本および島原文庫本『和歌知頭集』や『伊勢物語愚見抄』『伊勢物語宗

長聞書』『伊勢物語闕疑抄』には、作者名に関する言及はない。『伊勢物語肖聞抄』は、「女誰ともなし。」という。一方、『冷泉家流伊勢物語抄』では、「はかなくてたへたる中とは、業平と染殿の内侍と夫婦なりしが……」と述べられており、同じく染殿内侍を作者と想定している注釈書に、『十卷本伊勢物語注』『増纂伊勢物語抄』『伊勢物語奥秘書』がある。

さらに、『伊勢物語』第二十四段「あつさ弓 ひけとひかねと むかしより 心は君によりにし物を」(686:あ5)について、本書では「有常むすめ」とする。一方、『袖中抄』では「女」、『新勅撰集』『続後集』では読み人知らずとし、具体的な作者を示さない。同様に、『伊勢物語』の古注釈でも、書陵部本『和歌知頭集』の他、『伊勢物語愚見抄』『伊勢物語肖聞抄』『伊勢物語宗長聞書』『伊勢物語闕疑抄』は、作者を明記しない。これに対し、島原文庫本『和歌知頭集』や『冷泉家流伊勢物語抄』『十卷本伊勢物語注』『増纂伊勢物語抄』『伊勢物語奥秘書』は、本書と同じく、作者を有常女と判断している。

『伊勢物語』第五十段からは、本稿の範囲内で2首の歌が採られている。すなわち、「朝露は きれ残りても ありぬへしたれかこの世を たのみはつへき」(688:あ7)と、「行水に かすかくよりも はかなきは おもわぬ人をおもふなりけり」(776:ゆ5)である。本書ではいずれも、小野小町の歌である。『伊勢物語』においては、93番、95番歌という、1首を隔てて並ぶ位置に存する歌であり、他出歌集を見ると、前者は、『続後拾集』『秋風集』、また後者は、『古今集』『定家八代抄』で、いずれも読み人知らずになっている。この章段について、小町と業平の贈答と解するのは『冷泉家流伊勢物語抄』で、「うらむる人をうらみてとは、小町、業平の一かたならぬをうらみ、業平は小町をうらむる也。」と述べる。同様に、当該2首の歌の作者を小町としていると解される古注釈には、『十卷本伊勢物語注』『増纂伊勢物語抄』『伊勢物語奥秘書』が挙げられる。なお、書陵部本『和歌知頭集』は、この章段についての記述が欠落しており、また、島原文庫本『和歌知頭集』『伊勢物語愚見抄』『伊勢物語肖聞抄』『伊勢物語宗長聞書』『伊勢物語闕疑抄』には、作者についての言及はない。

また、『伊勢物語』第六十五段「さりともと思ふらんこそ かなしけれ あるにもあらぬ 身をしら

すして」(721:さ10)は、『新勅撰集』では読み人知らずであるが、本書では二条後の歌とする。同じく作者を二条后とする説は、書陵部本および島原文庫本『和歌知頭集』の他、『冷泉家流伊勢物語抄』『伊勢物語肖聞抄』『伊勢物語宗長聞書』『十卷本伊勢物語注』『増纂伊勢物語抄』『伊勢物語奥秘書』に見出せる。その一方で、『伊勢物語愚見抄』では、『伊勢物語』における当該歌の直前の歌、「海人の刈る 藻にすむ虫の 我からと 音をこそなかめ 世をばうらみじ」が、『古今集』恋五 807 番の「典侍藤原直子朝臣」の歌であることから、二条后ではなく、直子であるとする。なお、『伊勢物語闕疑抄』には、とくに言及はない。

以上のように、本書における『伊勢物語』の歌の作者記載は、『冷泉家流伊勢物語抄』『十卷本伊勢物語注』『増纂伊勢物語抄』といった古注釈が述べる説の流れを汲むものと推察される。この点についても、前稿までの考察と軌を一にする結果である。

なお、『源氏物語』の1首(813:み12)は、藤壺宮の歌で、須磨巻に見える。この巻の歌は、前稿までにも、(374:つ13)に見られるところである。

最後に、『新編国歌大観』の範囲では他出が確認できない歌は、(692:あ11)(693:あ12)(696:あ15)(700:あ19)(701:あ20)(708:あ27)(709:あ28)(802:み1)(804:み3)の9首存する。「あ」の歌に頻出している点や、用例が比較的近接して見られる点にも留意しておきたい。あるいは、同じ作品からの採歌か。

附記

本稿は、同志社大学文化情報学研究科における2015年度秋学期の授業「日本古典文学情報特論2」の内容の一部であり、また、「古典籍の保存・継承のための画像・テキストデータベースの構築と日本文化の歴史的研究」(同志社大学人文科学研究科第19期研究会第4研究、平成28～30年度)における研究の一部である。

用例収集に際し、『新編国歌大観』CD-ROM版 Ver.2 とともに、竹田正幸氏(九州大学大学院システム情報科学研究院)作成の文字列解析器`e-CSA Ver.2.00、を使用した。